

論文審査の要旨
(Summary of Dissertation Evaluation)

博士の専攻分野の名称 (Major Field of Ph.D.)	博士 (文学) Ph.D.	氏名 (Candidate Name)	李 莘梓
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
論文題目 (Title of Dissertation) 鏡物の世界—『唐鏡』を中心に—			
論文審査担当者 (The Dissertation Committee)			
主 査 (Name of the Committee Chair)	教授 河西 英通		
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)	教授 溝渕 園子		
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)	教授 妹尾 好信		
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)	教育学研究科	教授 竹村 信治	
〔論文審査の要旨〕 (Summary of the Dissertation Evaluation)			
<p>本論文は従来研究が少なく、またその多くが出典研究に留まっていた『唐鏡』について、著者の藤原茂範の編成理由及び編成過程を詳細に解明したものであり、また『唐鏡』を含めた鏡物そのものがいかなる世界を開示したかを論じたものである。その際、立脚している視点は、最新の研究をふまえて、鏡物を文学ジャンルの中の歴史物語ととらえ、その文学性に着目した点である。</p> <p>第一章では、『大鏡』『今鏡』『水鏡』『増鏡』（いわゆる四鏡）を語りの場の設定、歴史叙述の形式・内容に沿って考察している。その結果、四鏡の共通点として、語り手・聞き手の両者が遭遇可能な語りの場で日本の歴史を語っていることを指摘している。これは第三章でみる語りの場が語りそのものと深く関わり、内容が中国史である『唐鏡』との相違点であると論じている。</p> <p>第二章では、『唐鏡』の著者と成立年代について分析している。その結果、①『唐鏡』の著者に関する先行研究の批判的考察から、藤原茂範説を支持し、彼の経歴、とくに漢学者としての高い見識を明らかにしている。②『唐鏡』の成立年代を、彰考館本『唐鏡』・松平文庫本『唐鏡』及び新しく発見された日蓮筆『唐鏡要文』との比較を通して、成範と日蓮が交流可能だった鎌倉滞在期以降『本朝書籍目録』成立時までの鎌倉後期であると推定している。</p> <p>第三章では『唐鏡』本文の考察を試みている。その結果、①四鏡と『唐鏡』序文に記載された書名由緒から「鏡」の意味を抽出し、鏡物の「鏡」には「歴史を鏡にする」意識（『貞観政要』）と「人を鏡にする」意識（『百鍊鏡』）が反映していることを指摘している。②『唐鏡』の語りの場である太宰府安楽寺について、同寺が九州のみならず、全国に権力を及ぼした権門寺社である上、菅原道真の加護があり、漢文学の聖地でもあること、語り手である中国人僧侶が中国文化について語る場としてはこの時代最適の地であったことを論ずる。③『唐鏡』における漢詩文を分析し、『唐鏡』が中国の歴史を軸に日本の歴史を組み込むことで、両国に共通している漢字文化圏の歴史像を築き上げたことを明らかにしている。④一方、中国に関する話題が漢籍以外の俗説・仏典で語られていたことを指摘し、中国には存在しない架空の歴史物語を日本において創作するという『唐鏡』の編集意図を明らかにしている。さらに⑤四鏡に記載された「唐」「唐土」という言説を分析し、日中交流を通して高まった日本における「唐」への関心を時代背景として、日本人の中国を知りたいという心理要求を土台に『唐鏡』が執筆されたと結んでいる。</p> <p>本論文は、『唐鏡』を中心に四鏡の総括的言及もふまえて、鏡物という文体、『唐鏡』の成立過程・編集</p>			

意図を考察している。鏡物は口述で歴史を物語として記録する文学作品であり、歴史や歴史を語る人を鏡にして現在及び将来の人に見せるという意思が明らかであるとして、『唐鏡』には当時の日中漢字文化圏の状況を記録する中で、日本人の自意識・対中国意識が鮮明にうかがわれると論じている。

高いテキスト読解力に支えられた実証的な研究であり、『唐鏡』研究を大きく進展させるものと評価できる。問題点としては、正統な漢学者がいかなる経路・意図で俗説や伝説、説話や野談などの文化に接近したのか、いわば鎌倉時代における文化の二重性（多層性）についての説明が求められる。今後の課題としては、鏡物の構造的（相関的）理解が求められる。またこの時代において、歴史を語る行為とは何を意味していたのかという問題が残る。この点は文学と歴史、文学ジャンルにおける歴史物語の再認識に向かわざるをえない根源的なテーマであるが、さらなる考察を期待したい。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（文学）の学位を受ける十分な資格があるものと認める。

備考 要旨は、1,500字以内とする。

(Note: The summary of the Dissertation should not exceed 500 words.)